



最近、姿を見なくなったのは、探さなくなっただけ眠れない日々が続いて、あなたに恋い焦がれた夜が夢のよう。

ひとつの恋が終わったみたいで少し寂しいけれど、貴方を求めている人は世界中にたくさんいるものね。これからもどこかで、誰かをやさしく包み込んであげてね、私の睡魔さん。

青白い部屋で目を開けた時には、もういなかった。きつと、ほかの眠れない人のところへ行ってしまったのね。「やさしい私の睡魔さん」ベッドの中で彼の名を呼ぶ。戻ってこないかわかっていても、目を閉じて囁く。甘い夢の残滓が、ほてった体が、まだ彼を求めているから。

眠れない夜に呼んでも、すぐには来てくれない私の睡魔さん。あなたが来たら話を聞かせて欲しい。不安がいっぱいで眠れなかつた人を落ちつかせ、寝かしつけたこと。怖くて堪らない夢を見た後でも、素敵な夢を見させてあげたこと。朝陽が昇って、夕闇が覆って、また星が瞬くまで待ってるから。



平日も週末も関係なく睡魔さんは働いているので、たまに息抜きをしたら？と提案した。金曜の夜から日曜の朝まで、リフレッシュしてきた睡魔さんはニコニコしながら仕事を再開する。金曜から一睡もせず遊んでいた私は、日曜日を丸一日寝て過ごす。これは私から睡魔さんへのサービスです。

規則正しく、私のベッドに舞い降りてくるやさしい睡魔さん。夜は包み込むように抱きめてくれて、朝は名残惜しむヒマもなく飛び去ってゆく。私はそんな睡魔さんが好きだけど。週末の夜の、なかなかに寝かせてくれなくて、お昼過ぎまで離れない、ちよっとイジワルな睡魔さんも、好き。

朝になっても、ちよっとも離れない。あと少し、もう少しと、布団の中で抱きかかっている。もう朝ごはんを作らないと。化粧をして、仕事へ行く準備もしないと。あなたのことは大好きだけど、また夜に会いましょうね、私の睡魔さん。



ある時は魔法使いに姿を変えて、お姫様を眠らせたのね。死神に姿を変えて、私の祖父を眠らせたのも、あなただったの。ねえ、もっとお話して、睡魔さん。

私も眠くなるまで傍にいて。



# 私の睡魔さん

明け方の冷たい空気で目が覚める。でも、ぬくもりがまだ恋しくく。丸まった毛布に包まれた。やわらかな肌触りは、あなたにやさしく抱きしめられているみたい……

ああ。おかえりなさい、私の睡魔さん。もう一度あなたと夢の中へ。夢の中で……

不眠症や、いつも眠たいバナナに捧げる……

今夜は、やさしい睡魔さんが現れますように

春木のん 著

chiche-シシユ-

幸せや笑いに溢れているとは限らない日常を切り出した短編小説はコチラから。

http://nanos.jp/honmou/page/77/  
Twitter @Haruki Non 発行 2015年10月下旬